

平成 26 年度 静生市参委第 6 号 協働パイロット事業

○ 「障がい児・者に対するやさしい歯科治療を
実現させるための協働事業」

○ NPO 法人 ホスピタル・プレイ協会

すべての子どもの遊びと支援を考える会



HPS Japan
Hospital Play Specialist

I 事業の目的・趣旨

趣旨

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト（以下「HPS」と称する）は、遊びを使って病気や障がいのある人々に「やさしい医療」を提供する英国生まれの専門職である。障がい児・者の歯科保健推進事業は、静岡市の抱える最重要課題のひとつである。受診前の待ち時間が待ち切れないこと、歯科受診がたいへん難しいことが障がい児・者の各団体からも指摘されている。その原因は、障がいの有無だけではなく、歯科医療の提供の方法にも課題があると思われる。今回の協働事業による医療者（静岡市障害者歯科保健センター、以下「歯科センター」と称する）とHPSのチームによる障がい児・者への歯科医療協働パイロット事業の展開が、歯科分野における医療環境の改善の第1歩を踏み出したと考えられるため、その内容を報告する。

目的

(1) 個別受診トレーニング

- ①受容段階をスケール化して、改善を確認する
- ②HPSが関わった患者の受容状態の改善
- ③患者および家族の満足度調査を行い、満足度の向上

(2) 歯科医療従事者研修

研修会前後のテストを行い、参加者全ての技術・知識・態度の向上

II 事業概要

- (1) 事業期間 平成26年7月31日から平成27年3月31日まで
- (2) 実施箇所 静岡市障害者歯科保健センター（静岡市葵区城東町24-1）等

III 実施スケジュール

7月から8月まで

- ①障がい児の歯科医療や保健活動の現場を見学し、受診を困難にする原因について確認する
- ②特に静岡市障害者歯科保健センターの現状把握を行う
- ③歯科医療の場面における受診を困難にする原因を抽出する
- ④改善するために必要な知識、技術、態度、器材等を検討する

9月から

*静岡市障害者歯科保健センタースタッフに対する院内研修実施と環境改善の助言

- ①上記解決策について院内研修を行う
- ②院内環境の改善について助言を行い、必要な器材等を作成し提供する
- *障がい児・者への個別対応
 - ①静岡市障害歯科保健センターをはじめ、歯科医療に初めて受診する患者に対する歯科受診適応トレーニングを個別に実施する
 - ②静岡市障害者歯科保健センターから地域歯科医療機関に受診できるようになるための地域移行トレーニングを個別に実施する
- *地域歯科医療従事者に対する研修
 - ①必要な知識、技術、態度等について普及・啓発を行う
 - ②研修カリキュラムの作成に対して支援を行う

IV 実施内容

- (1) 歯科センターの見学と現状把握 (7・8月)
 - ・歯科医療の場面における受診を困難にする原因を抽出する
 - ・改善するために必要な知識、技術、態度、器材等を検討する
- (2) 歯科センターにおける院内環境の改善と助言 (7・8月)
 - ・待合室・支援室・診療室・レントゲン室・トイレ等への装飾
 - ・支援室への玩具等の配置
 - ・ディストラクション用品、プレイ・プレパレーション用品の作成と準備
- (3) 障がい児・者への個別対応 (8月～3月)
 - ・歯科センターを初めて受診する患者または歯科恐怖症の患者に対する歯科受診のためのトレーニング
 - ・歯科センタースタッフとのチームとしての関わり (治療前の導入プレイ・プレパレーション、治療中のディストラクション・セラピー、治療後の振り返り遊びなど)
 - ・歯科センターから他の歯科医療機関にて手術を行う患者・家族への支援
- (4) 患者家族と歯科センタースタッフに「HPSの関わり、環境」について、HPSが関わる前・後の比較に関するアンケート調査を実施 (8月～3月)
- (5) 歯科センタースタッフに対する院内研修実施と環境改善の助言 (8月、12月)
- (6) 倫理的配慮

歯科センターにおける写真、手紙の掲載については患児保護者に対し、口頭と文書により説明し、プライバシー厳守を約束し、了承を得た。

V 実施の結果

(1) 協働の効果

1) 歯科センターの見学と現状把握

歯科医療の場面における受診を困難にする原因には患者自身が感じる不安・恐怖・痛みなどが考えられる。歯科センター内は白い壁で清潔感があるが、病院独特の緊張感をもたらす空間であると感じた。特に恐怖症や不安を抱えている患者にとっては余計に緊張が増す可能性もある。患者を招き入れるという対応も含めた雰囲気づくりを考えた。

2) 院内環境の改善

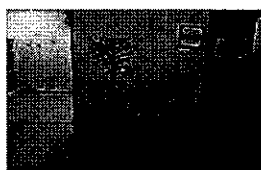
院内環境の改善に関しては、子どもだけでなく大人の患者も来院することを考慮し、幼稚な装飾とならないように考慮した。室内装飾のテーマは自然とし木を中心として、鳥、花などを配置し優しい室内空間とした（写真1・3）。また、支援室は子どもが遊ぶプレイルームでもあるため、子ども達が楽しめる空間とした（写真2）。

① 各部屋の壁面装飾、玩具の配置

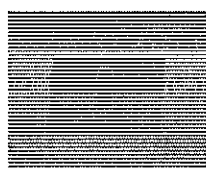
待合室（写真1）



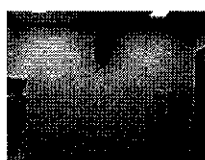
(改善前)



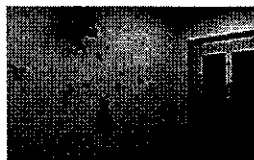
(改善後)



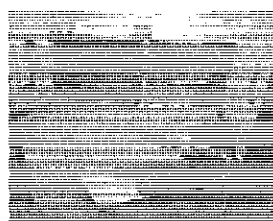
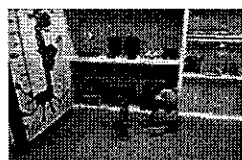
支援室（写真2）



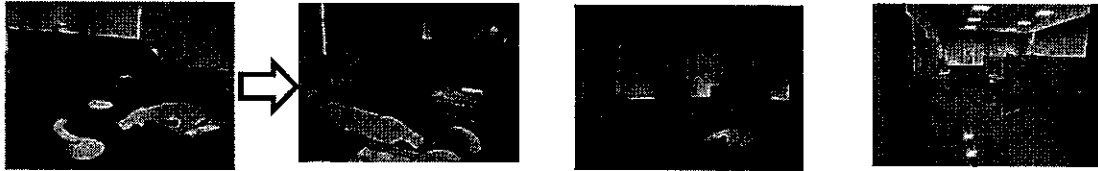
(改善前)



(改善後)



診療室（写真3）



（改善前）

（改善後）

② プレイ・プレパレーション・ツール

プレパレーションは、患者が受ける処置・治療に対する情緒的な準備であるが、HPSが行うのは遊びを用いたプレイ・プレパレーションである。遊びを用いて緊張した気持ちを和らげ、診療へと気持ちを導入することがプレイ・プレパレーションである。診療中にどんなものでディストラクションをするのかを患者と相談して決めることもプレイ・プレパレーションに含まれる。

プレイ・プレパレーション用品としては以下のようなものを作成し、準備した。

プレイ・プレパレーションのための写真カードは歯科衛生士が以前より使用していたものを必要に応じて共有させてもらった。

- ・ぬいぐるみのプーさんの口を開けラミネートした歯を貼った。（写真4）
- ・歯型の宝探し（写真5）
- ・歯型のポスト（写真6）

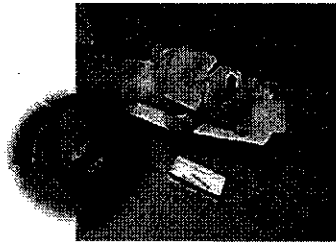


写真4

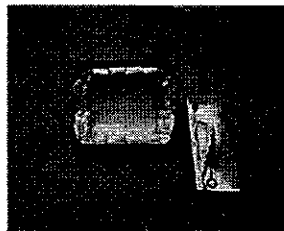


写真5



写真6

③ ディストラクション・セラピー・ツール

ディストラクション・セラピーは遊びを用いて患者の気持ちを痛みや不安・不快な場面からそらすための遊びの技術である。ディストラクション・セラピーには患者が治療を肯定的に受け止められることにもつながる効果がある。

ディストラクション・セラピーのツールとしては iPad・歌絵本・キャラクター絵本・音絵本・レインスティック・光る扇風機などを準備した（写真7,8,9）。

個別に好きなもの、クレヨンしんちゃん・名探偵コナン・お母さんと一緒・演歌などは、その都度、患者に合わせて事前に準備した。

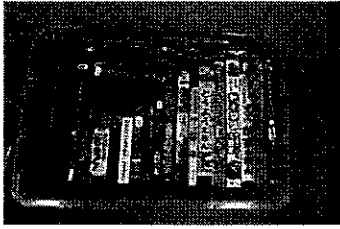


写真 7

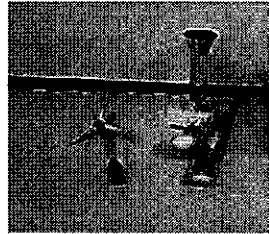


写真 8

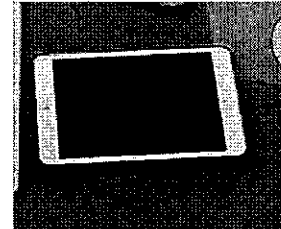


写真 9

3) 障がい児・者への個別対応

医療スタッフとHPSのチームとしての関わりとして治療前の導入プレイ・プレパレーション、治療中のディストラクション・セラピー、治療後の振り返り遊びなどを実施した。歯科センターでは、以前より必要な患者には、発達に合わせ写真カードや絵カードや模型などでプレパレーションを実施している。HPSはプレパレーションが円滑に出来るように患者に付き添い支援を行った(写真10)。またHPSも必要に応じてプーさんを用いたプレイ・プレパレーションを行っている(写真12)。



写真 10 HPSもスタッフのプレパレーションに参加した

写真 11 子どもが選んだ数字絵本を用いたディストラクション

治療後の振り返りの遊び(写真12)もディストラクション・セラピーと同様に経験した治療を肯定化し、再び日常の生活に戻れるようにする支援である。不安を乗り越えて、終えた気持ちを受け止め、満足した気持ちで落ち着いて帰院できることが次回への継続した治療にも重要なことである。

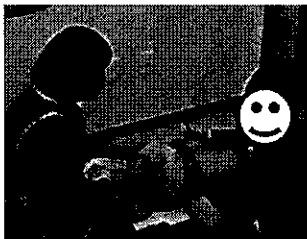


写真12 プレイ・プレパレーション、振り返り遊びのどちらにも用いる遊び

また、今回、HPS が歯科センターにて関わった患者数はのべ 198 人であり、各月の HPS の人数は以下のとおりである。

表 1 月別の HPS の関わった患者数 (人)

月	8	9	10	11	12	1	2	3
人数 (人)	49	24	23	24	24	14	7	5

HPS は治療が円滑に行われている患者に対しても治療が長時間になり、苦痛な様子が見られた際には、ディストラクションでの対応を実施した。また次回も嫌がらずに来院できるように治療終了後の振り返り遊びなど、機嫌よく帰院できるような関わりや助言を行った。歯科センターを初めて受診する患者または歯科恐怖症の患者に対しては、1 歩ずつ段階を踏み、恐怖・不安の軽減を行った。第 1 段階として、「嫌がらずに来院し歯科センターの環境やスタッフに十分慣れる」ことを目標とし、全く診療室には入らず支援室にて遊びのみを行った。第 2 段階は「診療室の環境に慣れる」ことを目標として診療室へ遊びながら誘い、診療台で更に十分遊び (写真 13)、診療室・診療台への不安を軽減させていった。第 3 段階では診療台で「座位にて歯磨きを行う」「水平位になる」「台を上下させる」等を目標とし、個別に様子を見ながら段階を進め、不安なく医師による診療へとつなげるトレーニングを行っていった。毎回、医師と歯科衛生士と HPS がチームを組み患者のために良いと思われる方法を確認し、それぞれの役割を担った。以下にそれらの関わりの一部の事例を挙げる。

① 事例報告

* 「地域の総合病院での全身麻酔による歯科治療への対応」の事例については別紙資料にて報告する。

事例 1

対象児：4 歳 男児 自閉症 知的障害 音に対して敏感

家族：両親と児の 3 人家族

通院目的：医療スタッフとの協働による受診トレーニング

期間：平成 26 年 8 月 1 日～平成 27 年 3 月 11 日

(現在も継続中)

好きなもの：機関車トーマス

嫌なこと：口を開ける事、歯磨き

母親と一緒に来院することが多い。家では父親が無理やり歯磨きを行っているとのこと、担当歯科衛生士が無理やりはしない方が良いとの話をした。歯科センターに来ることも嫌がっていた。当初は 1 週間に 1 度の来院だった。支援室での遊びでは母親や HPS の手



写真 13

を取りクレーン行為が見られていたことから発達も1歳5か月前後ではないかと思われた。チームで話し、母親とも相談し、最初の目標は「嫌がらずに来院できる」こととしてトレーニングがスタートした。HPSは児が来院するのを入口で待ち受けて支援室での遊びに誘った。トーマスの玩具・絵本・カード等、自由に手に取り遊ぶことが出来るように配慮した。「口を開けることが嫌」とのことだったため、口を大きく開けた歯型のポスト(写真6)に児の好きなトーマスカードなどを片付ける時に用いた。児は嫌がることなくトーマスカードで遊んだ後に、この中に毎回片付けていた。来院も徐々に嫌がらなくなり、4回目の来院の頃には、嫌がらずに自分から走って来院し、支援室でもリラックスして家にいる時のように寝そべって遊ぶ姿も見られるようになった。HPSにも笑顔で接することが多くなり、ぬいぐるみのプーさんへの歯磨きも出来るようになった。6回目にはプレイ・プレパレーションで歯ブラシの絵カードを提示してからプーさんへの歯磨きもできるようになった。7回目からは月に1度の来院になったが、喜んで来院した。絵カードを提示しプーさんへの歯磨き、自分も歯磨き、母からの仕上げ磨きもできた。9回目の来院では、チームで話し合い、母とも相談し診療室へ散歩に行くこととし第2段階「診療室の環境に慣れる」に進めた。予め診療室まで児の好きなトーマスカードを順路に沿って掲示し、診療台にはトーマスの玩具・絵本・トーマスの動画入りのiPadなどを配置し準備した。(写真13)母に抱っこしてもらい、順路に沿ってトーマスカードを探し、嫌がることもなく診療台の玩具を見つけ、すぐに遊び始めた。次にiPadに興味を示したためトーマスの動画を見せると喜んで見ていた。その間、診療台を少し寝かせたり起こしたり上下に動かしたりした。児は少し緊張する様子も見られたが動画に集中していた。診療室に来られたことをみんなで褒め、終了後は自分で靴を履き笑顔で待合室に戻り、またiPadで遊んだ。その間も児はHPSに頭をくっつけてきたり、笑いかけたりとすっかり慣れてきた様子が感じられた。10回目の来院では第3段階「水平位になる」を目標とした。支援室で遊んだ後、診療室に誘うと自分から歩き、スムーズに診療室に入った。診療台の上の玩具で遊びiPadのトーマス動画に夢中になっていた。診療台を少し傾けた状態から徐々に水平位にしていった。児は、動画は見ていたものの少し緊張した様子も見られ、近くにいた担当の歯科衛生士が少し動くたびにキョロキョロし警戒していた。母に児の手を握ってもらうよう促し、母にも児が安心する役割を担ってもらった。しばらく水平位で動画を見て終了した。水平位になれたことをみんなで褒めた。待合室に戻ってからもiPadを自分で操作して遊んでいたが担当の歯科衛生士にも甘える様子が見られていた。11回目の来院では、第4段階「歯科医師に慣れる」を目標に取り組んだ。いつものように、自分から診療台に行きiPadで遊び、医師も一緒に遊びに参加した。徐々に水平位になることが出来たが、医師に警戒しているため母が医師の座る位置で児に歯磨きを実施することにした。児は母親への安心感からしばらく笑顔で歯磨きされながら医師が持つiPadで動画を見ていた。歯磨きが出来たことを褒め終了した。母は「こんなに長く歯磨き出来たのは初めて」と感想を述べていた。12回目の目標は第5段階「歯磨きを母から医療者へ」とした。児は、支援室でも楽しく遊ぶがiPad

でのトーマス動画は診療台でと言うことをすっかり理解できるようになっており、動画を見ながら水平位までは不安なく出来た。母からの歯磨きは受け入れるが医療者の介入がなかなか難しく、今回は無理せず、今までの行為を繰り返すにとどめた。13回目の目標も前回同様「歯磨きを母から医療者へ」とした。今回もiPadでの動画を見ながら母からの歯磨きを受けた後、医師がiPadを持ち遊びながら上手に母と交代して歯磨きをし、嫌がるとまた母に代わる等を繰り返して歯磨きを続け、最後に10を数えて終了した。その後しばらく、そのままの水平位で動画を最後まで見て、母からの歯磨きと医師からの歯磨きが出来たことを褒めた。支援室に戻り、振り返りを行い「歯磨き出来たね」と歯ブラシを見せると口を開け自分の歯を指差して微笑んでいた。今日の片づけはカードのみならず、トーマスの玩具まで歯型ポスト(写真6)に詰め込んでいた。次回も1ヶ月後の来院となりトレーニングは継続している。

事例2

対象児：7歳 男児 発達障害（言葉が出ない）

家族：両親と妹、兄との4人家族

通院目的：歯科恐怖症の克服のトレーニング

期間：平成26年8月16日～2月14日（現在も継続中）

月1度のトレーニング実施

好きなもの：名探偵コナン

苦手なこと：大勢人がいる場所、環境の変化

痛み：大声で泣きながら、身体の動きが激しくなる

両親・妹と一緒に来院するようになった。初診は3歳だが当時母が困っている事としてクレーン行為を挙げていることから発達には遅れが見られていたと思われる。初診時より歯科医院に対する恐怖心が強くトレーニングにより医師による歯磨き・診査が出来ていた時期もあったが、6歳頃より、怒って来院するようになり、歯科医院以外の生活でも怒りのコントロールが難しくなり、落ち着くための服薬が増えたとのことであった。その後は家族の抑制下での歯磨き・診査を継続的に実施していた。平成26年より担当歯科衛生士の交代・HPSの介入を機に、トレーニング開始となった。HPS介入時は嫌がって父に引きずられるように泣きながら来院していたため、第1段階として「泣かずに来院し、泣かずに帰る」ことを目標とした。介入当初は遊びには、ほとんど興味を示さなかった。毎回コナンのDVDを持参するが、落ち着いてみることはあまりなかった。2回目の来院時、医師の歯磨き中に持参のコナンDVDをディストラクションに用いるも、体を激しく動かし泣いていた。事前のカード提示では「歯磨きとミラー」であったが兄に苦痛な様子が見られたためミラーは行わず終了となった。ところが兄はもっと泣き叫び、パニック状態になってしまった。兄は泣いてはいたが事前のカード提示の通りミラーもおこなうつもりでいたのだと後になって理解できた。3回目の来院時、HPSが支援室入口に玩具をたくさん並べ、

「コナンの間違いさがし」絵本も準備し、児を待っていると、また泣き・怒りながらやってきた。支援室を見るとすぐに泣き止み、玩具を物色し「コナンの間違いさがし」を見つけ読み始めた。担当歯科衛生士によるカード提示後、すぐに診療室に行き、診療台での歯磨きもスムーズに出来た。医師が歯磨きを終了しようとする HPS の方を向いて右手の人差し指を立てた。「まだ出来る？」と聞くと動かずにいた。医師がミラーを実施し終了すると納得できたのか、落ち着いて、HPS に促されて「ありがとうございました」のお辞儀をしていた。支援室に戻り HPS が再度、歯ブラシ・ミラーを見せて「今日はこれが出来たね」と言う手で「もういい」と言うように押し返してきたが表情は穏やかだった。4 回目の来院は母と妹と一緒に泣かずに来院できた。母は家で歯科センタースタッフの写真を見せ準備していたこと、甘えられる父もいなかったことが良かったのではないかと話していた。HPS もこの日は、待合室の椅子に名探偵コナンの映画のパンフレットを準備し並べて待っていた。児は興味を示したパンフレットを手にし、診療室へもスムーズに行き、自分から水平位にもなれた。医師の歯磨き実施、ミラーになるところで起き上がってしまった。座位になったが自分から「ミラーを口の中へ」と示していた。診療室から出る時にも診療室の電気を消し、余裕の行動で待合室へ戻った。最後までパンフレットを見ながら落ち着いて帰院した。5 回目はインフルエンザ接種後の来院とのことで、機嫌が悪いのではないかと心配したが母と妹は先に、児は父と一緒に泣かずに走って入ってきた。前回同様に待合室の椅子にコナンのパンフレットやグッズを並べて置くとともに遊び始めた。途中、担当歯科衛生士よりのカード提示があり、遊びを中断して HPS と一緒に見た。「大丈夫？」と聞くと待ちきれないように診療室に進み、自分から水平位にもなり、医師が歯磨きを実施。ディストラクションは「ハミガキ」「ミラー」と今行っている事の説明をした。終了後も妹の呼びかけで支援室に行く。(母は今までにそんなことはなかったと話していた) コナン以外の車の音絵本にも興味を示し、音を出して遊んだり、ページをめくって見ている。全く泣くことがなく、落ち着いて帰院した。6 回目の来院は早めに駐車場に着き、児はすぐに来院したが、父が周囲で時間をつぶしていた為に機嫌を悪くし、泣いての来院となってしまった。並べて置いたコナングッズを見てすぐに機嫌も戻り遊び始めた。今日はコナン新聞が気に入ったようだった。カード提示も手でよけてはいたが、しっかりと確認していた。診療台にも自分で行き、水平位になり、コナン新聞を見ながらの歯磨きとなった。その後のミラーでは起き上がってしまった。座位にてミラーを行い、今日予定したことは出来たことを児と確認して褒め終了し、機嫌よく帰院した。第 1 段階の目標は達成できているが現在もトレーニングの継続中である。

4) 患者家族と歯科センタースタッフへの「HPS の関わり、環境」について

HPS の介入前と介入後の変化の比較アンケート調査結果を次に示す。

① 患者家族

HPS が介入してからの変化について、55 名の患者家族へのアンケート調査を実施した。

「環境について」も「HPSの支援について」も「とても良い」または「ある程度良い」との評価が多く見られた(図1)。

また、「HPSの関わり後の気持ちの変化」についてもHPSが関わる前よりもHPSが関わった後は「表情1」と「表情2」が多く見られていた(図2)。

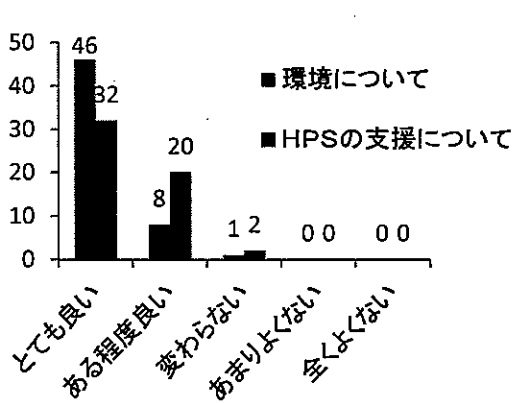


図1 HPS介入後の変化(n=55)

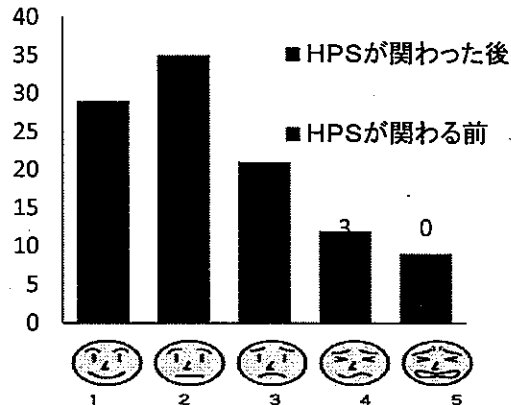


図2 HPSの関わり後の気持ちの変化(n=53)

「HPSの関わり後の気持ちの変化の内訳」については、図3の通りである。

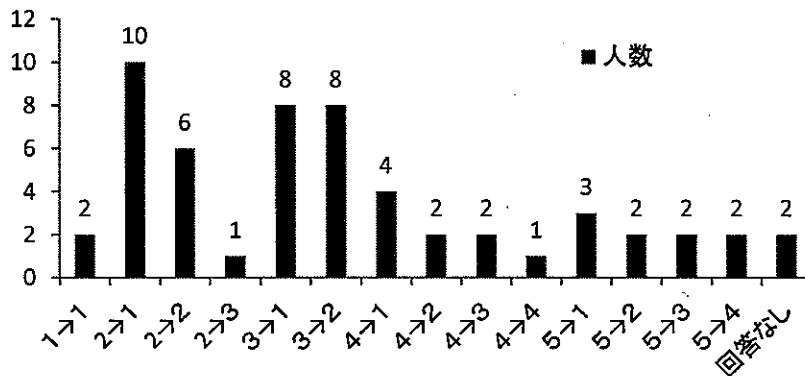


図3 HPSの関わり後の気持ちの変化の内訳(n=55)

なお、自由記述での患者家族の感想は次のような内容であった。

感想

- ・子どもの不安が減った
- ・苦手だった歯医者が好きになった
- ・歯医者に上手に行けるようになってから他の病院でも診察が受けられるようになった
子どもが興味を持ちそうなものなどを用意して下さり、優しい声かけなどで気分よく診察に取り組むことが出来る
- ・診察に来たのに遊びに来たかのようになり、笑顔が出ていた
- ・いっぱい、いっぱいな心境の中、治療中音楽などで気を紛らわせてもらって助かった

- ・好きなことや物をたずねてもらって対応しているのでよい
- ・HPSは必要な存在だと思う
- ・リラックスして遊びの延長で診察が出来助かった
- ・慣れてきても、いつも入る時に緊張するので気分を乗せてもらえてよかった
- ・表情には出ないがプラスになった
- ・嫌がらず自分から「時間に遅れてしまう」とがんばってくるようになった
- ・連れてくる親の負担が減った
- ・人により違うと思うが先生と歯科衛生士さんがいる中で見て頂く方が落ち着いて出来た

② 歯科センタースタッフ

スタッフ8名へもHPSが介入してからの変化について同様のアンケート調査を実施した。「環境について」も「HPSの支援について」も「とても良い」または「ある程度良い」との評価が得られた(図4)。

医療スタッフの自由記述での感想は次のような内容であった。

感想

環境について

- ・明るく、楽しそうな印象で入りやすい環境になった。万人向けの環境づくりにはセンスが必要と感じた。
- ・年齢・好みなどいろんなパターンがあれば、より効果的、装飾をきっかけにして話進めるなどコミュニケーションツールにもなりよい
- ・少しデコレーションしすぎているところはあるが雰囲気はよくなった
- ・室内が明るく華やかになり、雰囲気もよくなった
- ・患者さんによってリラックスする環境になっている方と患者さんの保護者の方から「少しうるさい感じがするわね」との意見があった
- ・装飾によって無機質な診療室が和やかな雰囲気になったと感じるがいろいろな障がいのある方が来院し装飾の受け入れ方が様々だと思う
- ・ステッカーがたくさん貼られているのは少し乱雑にも見え、落ち着かない感もあるパーテーションが有効に使えるのでパーテーションに壁紙も貼り、ステッカーも併用しトータルで空間を演出するなど工夫できることはあると思う 装飾のプロにお願いしてもよいと思う
- ・全部同じでなく、何も無い場所も必要と思う

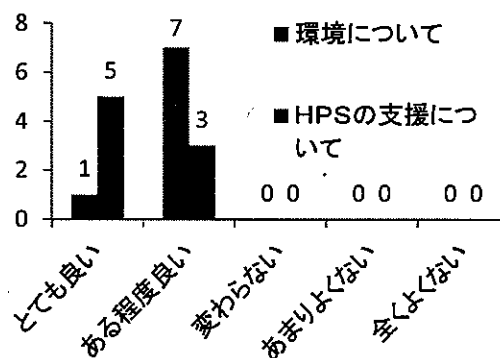


図4 HPSの介入後の変化(n=8)

HPSの支援について

- ・導入・入室・処置・退室までとてもスムーズに出来た患者さんを見て感動した
- ・患者さんの負担感を減らす工夫は必要であり、HPSの働きはとても大切だと思う
大きな不安を抱えて来院される方に寄り添い、気持ちをくみ取るHPSの存在は大きいと思う
- ・処置する際、気がそれていることでスムーズに処置が行え、五感を刺激することで緊張が和らぐのが分かりディストラクションは大変有効かと思う
- ・上手なディストラクションも見れ、参考になった 健常児に比べその日により変化がある患者も多いので医師・衛生士との連携も含め大変さが見えた
- ・明らかに協力的になるケースや今まで見ることが出来なかった笑顔などとても有効
- ・リラックスして楽しそうにしている患者は増えたと感じる
- ・HPSの快の関わりが医療に対する信頼感をもたらす効果があると感じた

その他

- ・衛生士の対応とは大きく違う点として、こども目線で、全力で接している姿は学ぶことが多い、
- ・継続的に関わってほしい
- ・継続的な介入があれば、患者・保護者・歯科スタッフにたくさんの利点があると思う
- ・全国的にも普及させたい
- ・継続を必要と感じる患者さんが多数いると思うので継続して来てほしい

5) 歯科センタースタッフに対する院内研修と環境の改善

①院内研修の開催

8月

参加者数：9名

講師：中山 陽子

会場：静岡市障害者歯科保健センター内会議室

12月

参加者数：5名

講師：中山 陽子／松平 千佳

会場：静岡市障害者歯科保健センター内会議室

- ②環境の改善については、前述IV(2) 歯科センターにおける院内環境の改善と助言の通りである。

(2) 今後への提言

- ① ホスピタル・プレイによる病児、障害児への支援が、医科だけではなく歯科においても有効であるケースが今回の協働パイロット事業で明らかとなった。よって、ホスピタル・プレイによる支援を、静岡市障害者歯科保健センターにて更に定着させることが重要であり、その結果、障がい児・者にやさしい「しずおか歯科治療モデル」を地域社会に広く発信する。
- ② 今回の共同事業の目標の1つが、静岡市障害者歯科保健センターに受診している障がい児・者が、地域の歯科医療機関において治療ができるように、地域移行トレーニングを個別に実施するということであつた。しかし、時間的な制約もあり、まだ十分に結果を出せていないため、今後さらに地域移行のための支援プログラム作りに取り組む必要がある。
- ③ 地域移行を進めるためには、地域歯科医療従事者に対し、HPSを含めたチーム治療について研修を行うことが重要である。HPSの存在を地域の歯科医療の分野にも認知してもらい、共に「障がい児・者にやさしい歯科治療」を考え・学び、一人でも多くの障がい児・者が自宅の近くの歯科医院にて不安なく診療ができる体制やチーム作りをおこなう必要がある。

(3) 参加者の考察と感想

歯科センターは障がい児・者に特化した歯科医院であり、障がい児・者に優しい配慮がいたるところに感じられる。「HPSの関わり後の気持ちの変化の内訳」においても、特に苦痛・不安の強い「表情4・5」が「表情1・2・3」に変化したことはHPSの関わりの成果でもあるが、もともと「表情1・2・3」の患者が多く日頃より患者のために工夫をした関わりを実践している事が分かる。患者家族からのアンケートにも現在の医師と衛生士との関係の中での治療に満足しているとの感想もあつた。HPSのディストラクションもそんな家族の気持ち、患者の気持ちを尊重し、必要な時に必要な関わりをするように心がけた。院内の環境づくりでは子どもから大人までの患者を考慮に入れて装飾を配置したがアンケートのスタッフの感想にもあるように、いろんな障がいのある方が来院し装飾の受け入れ方も様々なため、もっと慎重に取り組む必要があつた。また事前にスタッフとの話し合いをもち、意見を聞く必要があつたと反省点が残る。HPSの個別対応に関しては患者との信頼関係づくりに重心を置いて関わりをもつた。今回、自閉症児との関わりが多々あつたが自閉症児であっても個別に全く違い、関わりの難しさを痛感した。児の発達に見合った好きな遊びにより、児の向いている方を共に見て共感することにより、児からの信頼を得ることに繋がると考える。事例1、事例

2の場合もHPSが児の信頼を得られ、話に耳を傾けてくれるようになり、良い方向へ向かったと思われる。更に患者に対し、遊びの選択肢があったことも信頼を得られる理由であったと考える。病院と言う場所では、自分では何も決められないことが多い。選択肢が少しでもあるだけで、自分で自分の事が決められるという安心感を与えることが出来るからである。また事例の中の母親自らがスタッフの写真カードを作成し児の通院を支援したり、HPSが促して、母親が児の歯磨きをしたり、児の手を握って見守ったりと母親にも役割を担ってもらうことは大変意味のあると考える。母親自身も緊張しながら、我が子と共に頑張ったという達成感ももてると考えられる。事例1、事例2の児は更にトレーニングの継続となるが特に障がい児・者にとっては未知の事への不安は強く、慎重にトレーニングを進めなければトラウマになってしまう可能性も多い。診療室に入れるようになっても仰向けの体勢で医師の診療を受けられるようになるには今後も粘り強い支援が必要であると感じる。しかしながら、患者家族・スタッフへのアンケートによりHPSの関わりに効果が認められ、患者の苦痛の軽減が出来たことは、今回の協働パイロット事業の目的が、達成できたのではないかと考える。医師・歯科衛生士・受付事務、HPSとそれぞれが役割を持ち、患者のためにチームで取り組むことが患者・家族の不安の軽減に繋がるのだと実感できた。

(4) 協働相手（職員）の意見・感想

歯科センタースタッフへのアンケート結果を参照

VI 協働・協力機関

静岡県障害者歯科保健センター

VII 担当スタッフ

- (1) 事業総括 : 松平千佳 静岡県立大学短期大学部 社会福祉学科 准教授、
HPS 養成事業責任者/NPO 法人ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会 理事長
- (2) トレーニングスタッフ : 中山陽子 NPO 法人ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会 ホスピタル・プレイ・スペシャリスト
在宅支援部門スーパーバイザー/元・静岡県立こども病院 HPS
- (3) その他(事務担当) : 南伸予 静岡県立大学短期大学部 HPS 事務局/NPO 法人ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会 理事

* 添付資料

- (1) 「地域の総合病院での全身麻酔による歯科治療への対応」の事例
(ホスピタル・プレイ・スペシャリスト事例集第5号掲載)
- (2) 患者家族・歯科センタースタッフへのアンケート用紙